



『Davidson's Principles and Practice of Medicine (デビッドソン内科学)』は 1952 年に初版が出て以来、2~4 年ごとに版を重ね、本書は第 21 版になる。これまでに英語以外の多くの言語（ギリシャ、フランス、ロシア、インド、トルコ、ポーランド、イタリア）に翻訳され、世界中の医師、医学生、医療専門職の内科学教科書として、200 万部以上の売り上げを誇っているものである。

デビッドソン内科学は、長年にわたって英国エディンバラ大学医学部内科学主任教授を務めた Stanley Davidson 卿（1894—1981）が自ら行った内科学系統講義の講義ノートに端を発するもので、当初から、堅実な内科診療（sound medical practice）を行うために必要な根幹部分（main element）の提供に主眼が置かれている。

20 回もの版を重ねる間に本書の体裁や内容は大きく変わり、今版では第 1 部「内科診療の基本」、第 2 部「内科診療の実践」という 2 部構成になっていて、第 1 部には総論的なテーマを扱う 7 つの章、第 2 部には臓器系統ないし疾患をテーマとする 21 の章が組み込まれている。どの章も、カラフルで分かりやすい図表が多用され、最新の医科学的知見が簡潔に記述されている。第 2 部の各章は、当該臓器系統・疾患に関する診察、機能解剖・生理学、臨床検査、症候、疾患各論が、そのような順序で記述されている。本書での特徴の一つが各章にちりばめられている EBM というコラムで、診療上しばしば話題となるトピックについて、最新のエビデンスがまとめられていて、大変有用である。

本書は内科学教科書ではあるが、わが国で一般的に行われている内科診療とは扱う疾患などの幅の広さが微妙に異なる。その背景には、医療体制の違いがあるように思う。英国には、1948 年に創設された国民保健サービス（National Health Service : NHS）があり、世界中のどの国にも完璧な医療体制が存在しえないなかで、英国民が誇りとする、優れた医療体制である。この先進的な医療提供体制のなかでは、狭い分野



スタンリー・デビッドソン卿



に特化した専門医でなければ扱うことのできない知識や技術を必要とする疾患や健康問題以外は、臓器系統にこだわらず、総合医（general practitioner : GP）が診ることになっている。したがって、学問分野としての臓器系統別専門性がほぼそのままの形で実地診療体制に反映されてきたわが国と異なり、英国では、学問における医学専門分野と、医療の専門分化には一線が画されてきたように見える。そのような医療体制堅持する英国で幅広い疾患や健康問題を扱う GP にとってコアとなる知識・技量の main element が本書に記載されているのである。

わが国でも、2014 年 4 月に厚生労働省においてまとめられる専門医のあり方に関する検討会報告書で、基本領域の 19 番目の専門医として、総合診療専門医が加えられている。近々、総合診療専門医がカバーする診療範囲と養成カリキュラムが作成される予定であるが、わが国で従来行われてきた内科診療よりも診療範囲が広がることは確実であり、少なくとも本書に記載された内容のすべてが、新たな総合診療専門医に求められる臨床能力のコアとみなされる可能性が高い。

本書が、わが国の急激に変化する医療提供体制のなかで、幅広い内科診療・総合診療を堅実に行ううえで、多くの医師、医学生、医療専門職の皆さんに活用していただければ幸甚である。

2014 年 3 月 聖路加国際病院院長

福井 次矢